

落語の魅力 伝える責任



繁昌亭大賞 桂かい枝

落語家の桂かい枝が昨年11月、「第13回繁昌亭大賞」に輝いた。英語落語で「全米ツアー」を行うなど旺盛な行動力、エネルギーシユな高座で人気を博してきた。今年は入門25周年。上方落語を背負う中堅となり、心境に変化があったという。

(横田加奈)

「今後は人情斬にも力を入れたい。聴き手に共感してもらえような落語が目標」—尾崎孝撮影

失われた演目復活 ■ 高座 初心者向けに

大賞は、上方落語の定席・天満天神繁昌亭(大阪市北区)が主催し、1年間を通じて最も活躍した中堅が選ばれる。だが、喜びの気持ちよりも、「落語の良さを観客に伝える責任感が増した」と気を引き締める。

1994年、五代目桂文枝に19番目の弟子として入門。師匠はいつも「幹を太くし、枝葉を自由に伸ばせ。どんなやり方でもいいから囃家を全うしろ」と言っていた。だからこそ一門には六代文枝やさん枝、文珍ら個性豊かな人気者がそろっている。

かい枝は、修業を終えてすぐに英語落語に取り組み始めた。師匠は何も言わずに見守ってくれたという。「師匠の『やってみてあかんかったら戻ったらええ』という教えは今も胸に刻んでいる」。2008年にはキャンピングカーなどで半年間に約30都市を巡る全米ツアーを敢行したほか、ライブワークとして25か国で公演してきた。

持ち前の行動力がかむしゃらに走ってきた。だが、最近、上方落語界全体のことを考えるようになったという。中堅としての自覚が大きくなったことが理由だ。今はテレビで

もおなじみの上方落語の人気者がいるが、「この先は分らない」危機感を募らせる。上方落語の演目を増やし、ファンのおすそ野を広げる企画などに重点を置き始めている。

繁昌亭では17年から、題名しか残っていない昔の演目を落語作家と協力して復活させるシリーズ「発掘カイシー」を続けてきた。繁昌亭の屋席では、初心者向けに冒頭で語るまくらを増やし、笑いの多い演目を選ぶ。「僕の高座は分かりやすく聴きやすい。落語の魅力を色々な方法で広めていきたい」と力を込める。

大賞を受賞してなお、自らの話芸に「全然満足していない」とかい枝。「周りの落語家はもっと自分を追い込んで鍛錬している。今年は、一から落語をやり直す気持ちで取り組みたい」と決意を新たにす。

来月20日、記念落語会云

2月20日午後6時半から、繁昌亭で大賞の表彰式と受賞記念の落語会が開催される。他の受賞者とともに、古典落語1席を披露する。06・6352・4874。